

轉換期における自我概念の変容 : J・Sミル における人間の問題

三溝, 信 / SAMIZO, Makoto

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

18

(開始ページ / Start Page)

71

(終了ページ / End Page)

100

(発行年 / Year)

1964-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006286>

轉換期における自我概念の変容

——J・S・ミルにおける人間の問題——

三 溝 信

一、問題の所在

この小論は、J・S・ミルを轉換期の思想家としてとらえ、彼の思想において、近代的自我の概念がどのような変容をとげねばならなかったかを明らかにしようとするものである。それは、換言すれば、市民社会的人間像——私は近代的自我をこの人間像の核心をなすものと考えているのだが——がこの轉換期に示した変容を、ミルの諸著作を通して追求しようとするところでもある。

そこでまず、ここで轉換期というのは何かということ、そしてまた近代的自我ということばで何を意味しているのかを、あらかじめある程度まで確定しておく必要がある。「ある程度まで」というのは、これらの問題は最終的にはこの小論の終りにおいて明らかになればよいことだからである。したがってここでは、問題の所在を明確にするという範囲で、これらの問題にふれておくことにする。

一般に市民社会と呼ばれる時期を狭義に限定すれば、発展期の資本主義社会と定義することができよう。発展期ということとは、一方で中世封建社会に対して資本主義社会がもつ相対的な進歩性がラディカルに展開されると共に、他方この社会が内在させている諸矛盾はなお顕在化しない時期ということである。したがって、狭義の市民社会は産業革命をもって終りを告げると考えなければならない。産業革命による工場制大工業の出現は資本主義社会の完成を意味するのであるが、それと共に、この社会に内在する諸矛盾が、特に次の二つの方向で前面にあらわれて来るからである。すなわち、第一に大量のプロレタリアートの対自的な出現。イギリスに関していえば、一八三二年の選挙法改正が単なるブルジョアジーの支配をしか生み出さないことが明らかになったときはじめて、プロレタリアートはブルジョアジーに対立するものとしての自己認識をもち、それがチャーチスト運動へと展開して行く。この階級の出現は、それが市民階級にとってまったく理解できない人間であったという意味で「妖怪」の出現であったし、また生産力の発展にもかかわらず発生した大量の貧民階級の存在それ自体も、市民がそれまでいっていたオプティミズムを破壊するに十分なできごとであった。第二に恐慌の出現。資本主義社会の矛盾の爆発点としての・そして同時に解決策としての・過剰生産恐慌は産業革命をまっけてはじめて出現した。イギリスの場合、一八二五年の恐慌がその第一回目であり、この後ほぼ一〇年を単位として好況と不況の波がくりかえされる。この恐慌の出現によって、市民社会は市民にとって不透明な・理解できないものとなり、発展期に彼らを支えていたオプティミズムはここでもまた否定されるのである。

このような社会的・経済的条件の変化は、当然思想上の変化をもたらさずにはいない。それは、市民社会を支えた自然法思想の破産となつてあらわれる。一方で、社会を構成する諸個人の同質性という思想が明らかに異質な存

在であるプロレタリアートの出現によってうちこわされると共に、他方、予定調和のオプティミズムは恐慌・「豊富の中での貧困」によって否定され、諸個人を導くはずであった「見えざる手」は喪失するのである。しかも、このように自然法思想の破産したその時、かつて封建的権力、または封建的勢力と特権的商業資本との均衡の上に成立していた絶対王制に対立して市民社会を実現させ、また市民社会においてその自然法思想を更に徹底的に現実化するために闘った市民階級——後者に関していえば典型的には産業資本家、イギリスにおいては彼らは重商主義政策をとる商業資本家と地主の連合権力に対立していた——は、今度は支配階級として登場し、プロレタリアートに対立しなければならなかったのである。その結果、例えば、かつて彼らの要求であった自由はすでに彼らにとって実現されており、したがって自由の要求が空虚化・形骸化されることが、つまり「イデオロギーとしての自由主義」に転化されることが、必要となるというような状況の転換が生じるのである。

したがって、転換期というのは、ひとことでいえば、資本主義社会の発展期からその完成期——矛盾の顕在化の時期、頹廢への第一歩の時期——への転化の時期、市民が被抑圧者から抑圧者に転化する時期、市民社会において歴史の進歩を支えていた自然法思想が破産し、新しく進歩の担い手としてプロレタリアートの思想、すなわちマルクス主義が登場する時期であるということができよう。イギリスに関していえば、産業革命は一八二〇年代をもつて終り、一八七三——九年の恐慌をさかいとして独占段階——そこでは諸矛盾はより一層拡大される——に入るといわれている。ミルが主要に活躍したのは一八三〇年代から一八七〇年代はじまでであり、したがって彼はまさにこの転換の谷間に生きたわけである。そして、なかなしく彼を「転換期の思想家」たらしめたものは、この時期にあって彼がなお依然として基本的には自然法思想を維持しつづけたこと、その限りにおいて発展期資本主義がもつ

ていた進歩性の余韻を残しながら、他方それを現実に適応させ、あるいは逆に現実に切り離してイデオロギー化させるといふ努力によって、ブルジョア思想の頹廢の先驅としてあらわれたこと、にあるといふことができる。その意味で、彼の全理論は、「宥和すべからざるものを宥和させようとする試み」であり、「生氣のない折衷論」(マルクス)でしかなかったわけである。

ところで、近代の自我は、西欧社会においては、「近代的」ということばの示すとおり、近代市民社会において確立されたものであるといわれている。したがってそれは近代的市民という人間像の中核をなす概念であると考えることが許されよう。市民とは、ブルジョアジー、すなわち資本家——もちろんこの場合発展期の、したがって小資本家——であった。そして彼らが資本家であったということは、客観的には彼らが「人格化された資本」といふ概念とざるをえなかったことを示している。⁽¹⁾したがって、近代の自我の概念は、この「人格化された資本」という概念との関連のもとに理解される必要がある。この関連を近代的自我の成立・発展に関して追求することは本論の課題ではないが、ただ近代的市民が客観的には「人格化された資本」にすぎなかったにしても、彼らが代表していたその資本が発展期の資本であったという点に関しては、十分注意を払っておかねばならない。この時期には、資本は、たえず自己を大きくしつつ(本源の蓄積)、同時に自己の活動舞台を空間的にも質的にも拡大するために闘わねばならなかったのである。そのためには、一方で、すでにある程度まで高まった生産力——それによって資本という社会的範疇が生み出されたのだが——を更に自己に適応した形に高めることが必要であったし、他方では共同体の枠をうちやぶることによって社会制度を変革し、権力機構を自己のものにする必要があった。資本のこの要求が、「人格化された資本」・すなわち近代的市民の主観においては、熾烈な自己外化の要求としてあらわれる。資本

が本来孤立的・自己中心であるのに応じて、まさに商品交換という鏡によって「我」が創られ確認され⁽²⁾ると共に、この「我」には、自然と社会を対象としてたとえず自己を外化すること・つまり自然と社会を「我」に適応したものにさせることが要求されるのである。ここに、近代的自我と労働・運動・認識との結びつきが生じるのであり、かつ主観化されたこの要求が資本制生産そのものを促進するのである。

しかしながら、転換期においては、すでに述べたように、発展期の資本がもっていたこの進歩的な側面は消失する。本源の蓄積を終った資本は、ますます自立的なものとして・つまり「物神」として確立し、資本家Ⅱ市民の資本への従属は強められる。いいかえれば、資本は自己増殖の体制を確立しており、資本家の人間的資質がかかり合う余地は非常に小さくなる。社会制度もまた資本主義社会として確立されており、そこで市民に要求されるのは、すでに完成されたこの社会をプロレタリアートに対して守ることではない。発展期の資本と結合して熾烈な自己外化の運動として示された近代的自我は、この時期にあってどのような変容をとげるのか。

今一度くりかえせば、ミルを通してこの変容を明らかにすることが、この小論の課題である。

(1) 近代的市民が「人格化された資本」であることによって負わねばならない性格に関しては、私の論文「A・スミスにおける人間の問題——『経済人』の概念を中心に——」(『社会学評論』第42号所載、1980)で述べている。

(2) この点に関しては、芝田進午が「資本論」の商品の概念を軸として、近代的自我の展開を明らかにしている。芝田進午「人間性と人格の理論」(青木書店、1967)第七章第二節。

二、所有と自我

資本制生産の確立によって生じる最も基本的な変化は、自己外化の手段が限られ、かつ固定することである。

このことは、本質的には、労働するものと労働手段・労働生産物との分離に起因する。市民社会においても、もちろん資本は一方で血みどろの収奪を行っておりそれによって拡大するのであるが、しかもなおその資本の初期性は、資本家と労働者を共に「生産者階級」として位置づけるのであり、その限りにおいて労働するものと労働手段・労働生産物との結合はなおある程度満されている。ところが、資本制生産の確立は資本家と労働者の分離を決定的なものとし、そのことによって労働手段・労働生産物を労働するものから切り離すと同時に、本来人類の普遍的な自己外化の活動である労働を資本の価値増殖の手段にかえてしまう。その結果、そこでは、マルクスが指摘しているように、労働は自己外化の活動としての意味をうしない、苦業に転化せざるをえなくなる。すでにマルサスは「怠惰の状態こそが明らかに人間自然の状態であり、勤勉や活潑ではないと思う」⁽¹⁾と述べて、「必要という刺戟」に人間を労働にかり立てるムチを求めるのであるが、この人間把握（労働感）はそのままミルにも受けつがれるのである。彼がイギリスの労働者に対してかこつ不満は、自分の仕事以外に閑して全く知能が低いこと、不誠実で監督がない限り怠けようとする⁽²⁾こと、等である。そして、マルサスが「必要という刺戟」に労働へのムチを求めたのと同様、ミルは「所有という魔術」にこのムチを、否むしろアメを求める。例えば、小作農やイギリスにおける農業労働者に比して自作農がいかに望しいものであるかをヨーロッパ各国の例をあげて説明し、A・ヤングのことをかりて「所有という魔術は砂を化して金とする」⁽³⁾と主張しているのなどはこの例である。所有そのものではなく所有の期待ですらこの魔術を

發揮する。「英國においては、農業労働者は彼の貯蓄の投資口として貯蓄銀行しかもたず、また節約によって高い地位にのぼろうとしても破産の危険の多い小商店主の地位しかないので、儉約によって日雇労働者から自作農の地位にのぼりうる者がもっているような強い儉約心のごときものは全然存在しないのである」といっているように。

このように、ミルの時代において、労働はもはや直接的には自己外化の手段としての意味を喪失する。労働が自己外化としての意味をもつのは、ただその社会的な結果においてのみである。すなわち、労働によって生み出される所有がこれであり、所有に至らない場合にも、労賃にこそ「外化された自己」が見出されることになる（この後者はまさに労働力の商品化に対応する「商品化された自己」の外化である）。

もっとも、労働生産物そのものではなく、労働の社会的な結果により強く「外化された自己」を求めるといふ考え方は、市民社会のそもそもから存在していた。例えば、ウエーバーが明らかにしたプロテスタンティズムの小生産者の場合にしても、労働生産物そのものではなく、労働によってもたらされる成功（資本の蓄積）こそが、自らが神の恩寵にあずかっているかどうかを確める手段だったわけである。しかしそのような間接性はあつたにしろ、そこではなお、労働する者と労働手段との結合が維持されているという一事によって、この自己外化の活動は主体的なものでありえた。ところが、資本制生産の確立したミルの時代においては、資本家と労働者の分離の結果、労働におけるこの主体性は喪失する。ここでは、労働が生活の手段化すると共に、自己外化の活動としては、労働はただ労賃という形態を外から与えられるにすぎないのである。先に引用したミルの主張は、この労賃を所有にまで高めることによって、労働するものと労働手段との結合をも回復しようとする空想であつたといふことができよう。他方、資本家にとつても、本源的蓄積の段階では「労働——成功」という関連で確められた自己は、資本の蓄積と

共に「ビジネス——成功」という関連に変わり、労働は彼から切り離されて、自己外化の手段としての意味をうしなうのである。そこに、「すでにスケールの大きい精神的な性格は単に伝統的なものとなりつつある。我国においては、ビジネスを除いては、現在エネルギーのはけ口はほとんどない⁽⁵⁾」というミルの認識が生じるのである。そしてここでもまた、ビジネスの成功は所有・すなわち富の蓄積という形態においてのみ確められることになるのである。

こうして、富が自己目的化され人間が手段化される社会——資本主義社会——の完成の当然の帰結として、人間の自己外化の活動はもっぱら富の所有という形態に帰着するのが一般的な傾向となる。富の所有こそが、自己認識の唯一の手段であり、そしてまた社会的評価の唯一の尺度でもある。「それ（富）は力と同義となった。そして、一般人の間でも富はますます力を増すことから、富は個人的な尊重の主な源となり、人生における成功の尺度・標識となった。社会におけるランクを一つ上にあがることは英国の中産階級の生活の大目的であり、富の獲得がその手段となった⁽⁶⁾」。また「……国民大衆の尊敬は何時でも、主として現在の社会状態に於て、権力を得る主要なる通手である所のものに向けられるものであり、そして英国の現制度の下に於ては、世襲たると自力を以って得たるを問わず、凡て富が政治上の権力の殆ど唯一の源泉である所から、真に尊敬せられる物としては、殆ど富と富の看板とのみ限られることになり、従って国民の生命は主にそれ等の追求にのみ献けられている……」⁽⁷⁾。ここに「我所有す、故に我あり」という自我の資本主義的形態が完成されるのである。

そこで、この「我所有す、故に我あり」という自我形態がもつ問題を検討してみよう。

まず、労働者においてこの自我形態はどのような意味をもつか。この小論の目的は主として近代的市民の自我の変容を追求することにあるから、この問題に関しては次の二点を指摘するにとどめたい。すなわち第一に、彼ら

は、無産階級ということばに示されるように、何ものをも所有しない。したがって、この自我形態のもとで労働者の自我を問題とする限り、彼らにとって自我の確立は不可能である。そのことは、資本主義社会の論理のもとでは、彼らは無に等しいということである。にもかかわらず労働者はやはり人間であり、そこには「我」の意識が存在する。したがって、労働者の自我はこの自我形態とは全く異った文脈で問題とされねばならないであらう。しかし第二に、この自我形態のもとでも、彼らの自己はすでに外化されてはいる。それはまさに、自己外化が労賃という形態を受けとるということ、私の外化活動は対象化されて労賃になるということ、である。そこには、「私は貨幣（商品）である」という自己認識の可能性は与えられているのであり、この認識はそのまま、資本主義社会における彼らの位置の認識に発展しうるものである。

ところで、本題にもどって、市民＝資本家の場合、自己外化はビジネスの成功として、すなわち富（資本）の蓄積とそれに伴う事業の拡大としてあらわれる。いいかえれば、ビジネスによって自己の所有する富が増大するところではじめて、彼らの自我が確立されることになる。ところがミルの時代においては、このような自我形態が一般化しながら、しかも同時に、このような形式での「自己外化——自己認識」の過程は資本家にとってすら多くの困難を伴うようになっている。すなわち第一に、絶えずくりかえされる恐慌がある。そこでは、すでに述べたように、社会はもはや不透明な、理解しえないものとなっており、しかもいや応なしに彼をその波動のうちに巻き込んでしまう。したがってそこでは、自己の計算（計画）に従った自己外化の活動はかつてのように容易ではない。外化された自己が富という形で蓄積されたとしても、いつ予期せぬできごとがそれを自己から奪い去ってしまうかはわからないのである。この意味では、社会は自己に対立するものとして登場する。そして、社会が

不透明でかつ巨大なものとなっているだけに、この対立においては社会の変革は問題になりえず、もっぱら自己防衛が主要な課題となるのである。この傾向は、第二に、競争によって更に強められる。ミルの時代は「自由競争華やかなりし時代」であった。そこでは、他人——他の資本——はすべて競争者・敵対者としてあらわれる。したがって、「我所有す、故に我あり」という自我形態は、自分以外のすべての人間と敵対する必然性をもっており、かつそうすることによってはじめて確立されるのである。このように、ミルの時代においては、自我は自己防衛的なることによって確立されざるをえないことになる。それは、本来自己中心的存在である資本の「人格化された資本」の上に投影された姿ではあるが、市民社会において自己中心的存在であるが故に自己拡大的でありえた自我が、ここでは、自己中心的存在であるが故に自己防衛的とならねばならなかったという轉換が生じているのである。そしてまた、自我相互間の敵対性の増大は、たえがたいほどの利己主義としてあらわれて来てもいる。だからこそ、生産論では自然法思想を受けついで自利心を肯定するミルは、にもかかわらず分配論をはじめとする各所で利己主義——自己中心的な自我——を攻撃せずにはいらなかったのある。この問題に関しては、第四節で更にふれよう。

なお、これも次節で更に詳しく検討するが、この自我形態のもとでは、当然個性の喪失という問題が生じる。このことは、すべての自己外化の活動が一律に貨幣という形態を受けとる——個性そのものが商品となる——ことの当然の帰結である。その意味では、この問題は、資本主義経済の倫理化であるベンサムの功利主義の成立と共に生じていたといわねばならないであろう。ここでは、詩とパンが、資本主義社会において同じ貨幣形態を受けとるのとまさに同様に、同じ「功利の量」によってはかられる——ベンサムはそのための七カ条の法則まで作り出した——のである。そして、萌芽状態にあるものを先取りして作りあげられたベンサムの理論が資本主義社会の完成に

よって必然的な現実となったとき、その結果生じた人間の貧しさにミルは慄然とならざるをえなかったのである。若きベンサム主義者であったミルが、ある日「今仮りにお前の人生に於ける目的が悉く実現され、お前の翹望している諸制度や思想の変化が悉く、今と云う今、完全に成就され得たとしたら、それは果してお前に取って大なる喜びであり幸福であらうか」と自問して「否」と答えねばならないことを知り、そのことによって深い苦惱に陥らざるをえなかったという事実は、何よりもこのことを雄弁に物語っている。そこから、次のようなきびしいベンサム批判も生じるのである。すなわち、「彼（ベンサム）自身の生涯は、イギリス史上最も貧弱な最も無味乾燥な人々の生きている一時代の中に消耗せられ、現世紀に入って一層優秀な人々が現れて来た時には既に老人となっていた。それ故に彼は人間の裡に、最も卑俗な人物の見得るものの外には殆んど何物も見てはいなかった。また性格の相違に就いても、走り乍らでも氣付き得るようなものの外には何物も氣付いてはいなかった」と。ベンサムに対するこのような批判が、同じ功利主義者——もっともミルは、功利の質、及び自己ではなく最大多数の功利を問題とすることでベンサムを「修正」しはしたが——であるミルによって叫ばれたところに、われわれは、自我の資本主義的形態がもたらした人間の貧困の深刻さを見なければならないであろう。

- (1) T. R. Malthus: "An Essay on the Principle of Population or a View of its Past and Present Effects on Human Happiness" (8th ed. London: Reeves and Turner: 1878): p. 45.
- (2) J. S. Mill: "Principles of Political Economy" (people's ed. London: Longmans, Green, Reader and Dyer: 1873): Book I, chap. VII.——以下「Political Economy」を意味す。
- (3) *ibid.* Book I, chap. VII.
- (4) *ibid.* p. 182.
- (5) J. S. Mill: "On Liberty" (people's ed. London: Longmans, Green, Reader, and Dyer: 1872) p. 41.

- (9) "Political Economy" p. 108.
- (7) J. S. Mill: "Autobiography" 1861 & 1870: 西本正美訳「ミル自伝」(岩波文庫1988) p. 183——かなづかみのみ現
代かなづかに改めた。
- (8) *ibid.* p. 144.
- (6) J. S. Mill: "Bentham" 1838: 塩尻公明訳「ベンサム」(同訳「ベンサムとコールリッジ」有斐閣1966所載) p. 88—
9.——かなづかみのみ現代かなづかに改めた。

三、自由の要求と人間形成

このように、近代的自我が「我所有す、故に我あり」という形態に帰着すること、その結果として利己主義と個性の喪失とが一般的な風潮となること、これがミルに与えられた現実であった。しかして、それはそのまま、市民社会において理想とされていた近代的自我の崩壊でもあった。疎外が一般化しはじめると共に、一方では中世にバラ色の世界を求めようとするロマンティズムが台頭する。これに組みしなかったにしても、人間の危機を感じる点ではミルもまたこの潮流と軌を一にしていたのである。彼にとって、自由の要求はこのような危機に対応するものとしてこそ意味をもつのである。

ミルの自由論は三傾向に大別しうるであろう。第一に、市民社会において自由の主張一般がそうであったように、被抑圧者の抑圧者に対する諸々の自由の要求がある(これは当然第二のものに連っている)。これは主要には婦人の解放要求において見られるものであり、また部分的には彼の「社会主義」論のうちにも見出される。第二に、これがこの節での問題となるのであるが、ひとことでいって人間形成のための自由の要求がある。それは、積

極的には、市民的自由をより徹底させようとする要求、あるいはすでに獲得された市民的自由の意味を考えなおしこの方向に体系づけようとする努力として示されるのであるが、他方消極的には、本来自由ではありえないものからの自由の要求（例えば、社会と個人を切り離して個人の自由を求めようとするような）へと墮しても行くのである。第三に、「イデオロギーとしての自由主義」がある。それは、「正義を犯さない限りでの各人の自由」という市民的自由の思想をその形式に関してはそのままに受けついだものではあるが、すでにブルジョアジーの自由が実現され、かつそれがプロレタリアートに対する著しい不正義を構成するという状況のもとで、一般論としてこのような自由を主張することは、自由の要求を空洞化させ、形骸化させることでしかない。この第三の自由論に関しては、この小論ではこれ以上ふれない。

それでは、ミルにおいて、人間形成のための自由の要求はどのような形でなされ、それは現実とどのようにかわるのか。

彼において、性格形成 (Formation of character) の上に決定的な影響力をもつのは、環境である。「要するに、性格形成の法則は、精神の一般法則から結果する派生的諸法則であり、ある一連の環境を想定し、精神の法則によれば性格形成の上にこの環境が与える影響は何かを考察することによって、精神の法則から演繹的に求められるべきものである」とい⁽¹⁾うことばが、これを示していよう。もっとも、このいささか宿命論的な性格形成論に関して、彼は、それが宿命論ではないというために、われわれは努力することによって性格をかえることができるのであり、そこに人間の自由があるともい⁽²⁾っている。その努力をなしう⁽²⁾るような「深徳の人 (a person of confirmed virtue)」のみが完全に自由であるということは正しいといえる」と。ここでいわれている自由そのものが重大な問

題を含んでいるのであるが、さし当りその問題は後にまわすとして、「深徳の人」ではない一般人の問題を考えてみよう。そこでは環境が決定的な意味をもつわけであるが、この環境それ自体は、資本主義の完成したミルの時代においては、性格形成にとって決して好ましいものではない。すでに前節で明らかにしたように、この環境は「我所有す、故に我あり」という自我形態を一般化させるものとなつてしまつてゐるからである。すなわち、富の欲望がすべての人々をとらえ、そして一切が貨幣によつて評價されるような環境が完成してゐるからである。そこには、利己主義が、そして個性の喪失が、一般化する必然性が存在する。すなわち、「事実共通福祉に対する関心は、現在の処、一般には極めて微弱な心的動機ではあるが、併しそれは決して本来強烈となり得ないものだからと云うのではない。それは詰り、人の心が私利にのみ資する事物に日夜傾注されてゐる如く、共通福祉に傾注される様には未だ習慣付けられていないからなのである。……」。現在の社会相の一般的特質となつてゐる根深い利己主義が、斯程まで根深くなつてゐる所以は、一つは現存社会制度の全行程が利己心の養成にのみ資する様になつてゐるからなのである。そしてそうした傾向は或る点に於ては、近代の社会制度の方が古代のそれよりも一層甚しくなつてゐる。と云うのは、個人が公共の為に無報酬で働かされる場合が、近代生活に於ては、昔の比較的小さな共和国に於けるよりも、遙かに少くなつてゐるからである⁽³⁾。また「異つた諸階級や諸個人をとりまき、彼らの性格を形づくる環境は日々に同一化しつつある。以前には、異つた身分、異つた隣人、異つた商売ならびに職業の人たちは、いわば異つた世界に住んでゐた。現在では大部分が同一の世界に住んでゐる。比較していえば、彼らは現在では同じものを読み、同じものを聴き、同じものを見、同じ場所に行き、同じ対象にその希望や恐怖をよせ、同じ權利と自由をもち、またそれを主張するのに同一の手段をもつてゐる⁽⁴⁾」等のことばに示されてゐるように。

このようなミルの不満は、現代社会にもそのままに当てはまるものを含んでいる。その意味では、資本主義の独占段階における「自己喪失」の問題は、すでにミルの時代——転換期——にはじまっていたといえよう。そして、環境のこのような画一化・一面化に対して、ミルは、今一度その多様性をとりもどすことによって、市民社会において近代的自我がもっていたべき側面をひきもどそうとするのである。この多様性の回復のための療法として、自由が求められる。つまり、思想及びその表現の自由・趣味や生活様式の自由・結合の自由等々——このような自由こそが個性を發展させ、更には天才を生み出す道だと考えられるのである。政治活動の自由もまたこの文脈でとらえられ（もっとも政治的自由の主張はこれのみにつぎるのではないが）、利己主義にかわる公共心を發展させる手段として考えられる。すなわち、「日常の仕事が彼をとりまく小さな圈内に彼の興味を集中させているような人が、彼の仲間 (fellow-citizens) のために、また仲間と共に、感じることを学び、意識的に大きなコミュニティの一成員となるのは、政治的討論及び集合的な政治行動からである」と。

しかしこれは、次節でとりあげる教育の問題と同様、循環論でしかない。土台の変化によって喪失したものを土台そのものの検討を抜きにして意識の上で再建しようとする空しい努力——それが、まさに環境の変化によって個性の喪失が問題となったその時に、個性的なものを前提としてそれによって環境の多様性をとりもどそうとする論理としてあらわれるのである。というのは、ここでミルは、まさに個性的なものが環境の上に外化されることを、その自由を要求しているわけであるが、問題は、自由がすでに存在しながら外化さるべき自己が見うしなわれているという事実にあるのだからである。その意味では、この自由の要求はすでに、ミルの自由論の第三の傾向としてあげた「イデオロギーとしての自由主義」への傾斜を示しているということもできよう。

と同時に、われわれはここに、ミルの自我概念の市民社会におけるそれに対する決定的な変容を認めねばならぬであろう。市民社会においては、自由の要求は、たとえそれが資本の論理によって必然的に生み出されたものであるにしても、自己外化の要求と強く結びついて存在した。市民革命における自由の要求は、政治権力の上に、社会制度の上に、自己を外化しようとする・つまりそれを資本主義的なものにしようとする運動であった。そこで自我は、一方で自己中心的な方向に核を形成しつつも（個人の成立）、この自己外化の運動によって外に開いていた。否むしろ、この運動を通しての自己認識があればこそ、自我の形成が可能だったのである。ところが、ミルにおいては、自由の要求はまさに外化さるべき自己の喪失に対応したものととしてあらわれる。彼が、個性の喪失を救うために環境の多様化を求め、利己主義の横溢に対して公共心を養うような環境を求めるといふ、そのような要求の上にたつて思想・言論・結合等々の自由を主張するとき、それは、そのような自由によって自己を外化しようとするのではなく、そのような自由があれば望ましい環境がえられ、それが外から自己を形成してくれるであろうことを期待しているのである。市民社会において「人間が歴史を創る」という側面が色こくあらわれていたとすれば、ミルの時代においては「歴史が人間を創る」という側面のみが強く意識されている。しかも現実の歴史は、ミルの願望にもかかわらず、人間に利己主義を、個性の喪失を、つまり「我所有す、故に我あり」という形態での自我を、いや応なく強制するとすれば、以上述べたミルの自由の要求は現実にはまさにこの歴史的必然性からの自由の要求という意味をしかもちえないのである。いいかえれば、ミルは、彼が要求した諸々の自由が十分に認められたとき資本主義の経済法則が消えてなくなることを期待しているのである。だから、「人間は自分自身に関して独裁者でありうる」という市民的自由の主張もまた、ロックにおいては絶対王権に対立するものとして、したが

ってそれを否定し政治権力の上に自己を外化しようとする要求としてあったし、スミスにおいてもまた重商主義政策との対決としてあったのに対し、ミルにおいてはそのような具体的な対決者をもたない。というよりは、対決者は、すでに不透明なものとなりあるいは自己に敵対的なものとなりながら、しかも自己にある一定の性格を強いる社会となっているのである。そして、巨大な社会に個人が向い合うという条件のもとでは、市民的自由の主張は、社会と自己との間に厚い壁を作り、「この中だけはオレの領分なんだぞ、オマエは入って来るな」といつている悲鳴の意味しかもたなくなる。換言すれば、市民社会においては社会との相互運動の中で確立された自我が、ここでは社会から切り離されることによって確立されると考えられるような状況が出現しているのである。「深徳の人のみが完全に自由である」ということは、まさにこの状況に対応する。というのは、このことは、環境が強い性格を拒否することのできる人のみが「我所有す、故に我あり」という形態の自我から解放されるというミルの考えを示していると考えられるからである。それは、本質的には、このような環境の中になお環境の変革を目ざしうる強い人間であると考えられねばならないであろう。⁽⁶⁾ところが、ミルの序述をたどって行くと、それが、彼の否定⁽⁷⁾にもかかわらず、東洋的隠遁の生活に通じるところに、彼の時代の苦悩があったといえるのである。

こうして、人間形成のための自由というミルの要求は、現実には空虚な・あるいは逃避的なものとなる。彼の時代に最も現実的な自由は、自由競争としてこそ花開く。そしてミルが、自然法思想の後継者として自由競争肯定論を展開するとき、スミスが全体社会に対してそれがもつ意味を中心に考へたのとは異なり、現代のブルジョア・イデオログとまったく同様に（したがってその先駆者として）、自由競争が人間形成にとっていかに望ましい制度であるかということの方に重みがかからざるをえないのである。そこから、困難こそが人間を育てるとい

うおきまりの論理が生れる。「精神的能力は最も激しく使われる時に最も発達するものである。しかしそのうちの一つをも無視することができず、また意志と知能の様々の努力によってのみ対処しうる多くの利害関係をもつとほどにそれらを激しく訓練するものがあるか」という利害意識の肯定論からはじまって、「競争を免れるということは、怠惰及び精神的倦怠に安住できるということであり、他の人々と同じように活潑で知的であることの必要から免れるということに他ならない」⁽⁹⁾、「競争による直接の刺戟から免れた場合には、生産者及び商人は彼らの金銭上の利益の命ずるところのものに関しては無関心となり、最も有望な見込みよりも慣習と結びついた現在の安楽の方を好むようになる」⁽¹⁰⁾等々の競争肯定論まで。

しかし、金銭的成功という全く同一のゴールを目ざしてなされるこの競争こそが、ミルの時代における環境の同質性を生み出したのではなかったか。人間形成のための、環境の多様性の論理と環境の困難性の論理とを、ミルはいかにして和解させようとするのか。

- (1) J. S. Mill: "A System of Logic Ratiocinative and Inductive" (new impression: London: Longmans, Green and Co. 1925) p. 567—以下「Logic」と略す。
- (2) *ibid.* p. 551.
- (3) 「*ミルの論*」 p. 241.
- (4) "On Liberty" p. 42~3.
- (5) J. S. Mill: "Considerations on Representative Government" (people's ed. London: Longmans, Green, and Co. 1867) p. 67—以下「Representative Government」と略す。
- (6) この意味では、「深徳の人」はマキアベリの「力強き人 *homo virtuosus*」という理想的人間像に通じる。つまり、マキアベリの時代に自己外化の活動とそれに連る「自我の確立」がそのような限られた人間にしか許されなかったという条件

が、ミルの時代に再び生じて来ているのである。

(7) 例えば、ミルは、これは自利心の肯定と結びついてではあるが、アクティブで自己保持的 (self-helping) な性格を肯定し、東洋的な受身の道徳を否定している。——“Representative Government” chap. III.

(8) “Political Economy” p. 172~3.

(9) *ibid.* p. 477.

(10) *ibid.* p. 563.

四、教育の責任

この和解の責任を負わせられるのが教育である。教育は、ミルにとって、単にこの矛盾のだけではなく、あらゆる矛盾の解決策として登場する。

ブルジョア・イデオログとしてミルは、前節で述べた論理によって、またスミス以来の「各人の利益の総和＝社会の利益」という論理によって、経済上の自由を肯定する。しかしながら他方、自由競争を基礎とするこの経済制度が生み出している悪——何よりも貧困、そして利己主義・個性の喪失——を無視することはもはや許されない。そこでミルは、この経済制度のもとでの自由競争が現在「相互の蹂躪・粉砕・排斥・追窮 (the trampling, crushing, elbowing, and treading on each other's heels)」をもたらしていることを認めつつも「この「進歩のための闘争」の後に来る未来の「静止状態 (stationary state)」——それは経済的進歩の極限としてとらえられる——を空想することによって自らを慰めるのである。」「しかし、人間の性格のために最もよい状態というのは、誰も貧しくなく、誰もより富もうとすることなく、また誰もより前へ出ようとする努力のために他人から蹴落されるとい

うおそれをいただくことのないような状態である」⁽¹⁾と。この「静止状態」に至ってはじめて、人間は、貨幣の奴隷であることから、したがって「我所有す、故に我あり」という自我形態から、解放される。そこでは労働もまた、自己外化の活動——主体的な活動——であるという本来の性格をとりもどすらしい。「望ましい中庸性とは、人々がそれに適合することを知らないような中庸性、すなわち、働く時には全力をつくし特に全精神をうちこんで働き、しかも単に金を得るためには、一日のうちほんの少時間、一年のうちほんの数日、一生のうちほんの数年を労働にさくということこれである」⁽²⁾ということばに示されているように（もともと、「金を得るため」という意味以外で人々が働くとき、その労働に人々がどのような意味を見出すのかはここでは不明なのだ）。

このミルのユートピア像には、前節までに明らかにした彼の自我概念が典型的にあらわれているということができよう。ここに描かれているのは、自己中心的・自己防衛的なものとならざるをえなかった自我の、寄り集った世界である。そこでは、人々はそれぞれにささやかな自分の世界を構築し、相互にその枠を固く守って生きている。街で会ってにこやかに挨拶を交しはしても、本質的には相互に無関係である。そして労働におけるこのささやかな中庸性——そこには自然と相対してそこに自己を外化しようとする・つまり世界をわがものに変えようとする荒々しい意欲はもはや全然見出しえないのである。「静止状態」というミルの表現は全く適切なものであったといえよう。それはまさに、相互に切り離され、それぞれに内へ向った人々の住む全く静かな世界だからである。

彼の自我概念に対応するミルのこのユートピア像は、同時に、彼のいっていた社会観——それはこの自我概念からの当然の帰結でもあるが——にも対応する。そしてこの社会観に関しては、彼は自然法思想の完全な後継者なのである。それは次のような彼の社会科学方法論からも明らかであろう。すなわち、「社会現象の法則は、社会状

態において相互に結合された人間の行為と感情の法則以外の何ものでもなく、またありえない。……。社会における人間は、個人の性質についての法則から引き出されかつそれに解消されるような特質以外のいかなる特質もたない⁽³⁾」と。つまり彼にとって、社会は「個人の総和」以外の何ものでもないものであり、その意味でもミルは本質的に個人主義的なのである。その限りにおいては、各アトムがそれぞれに自足している「静止状態」がこの社会観の延長線上の終点として描かれたのは、当然のことであつたといえるのである。

しかし同時に、この社会観そのものは、一方では、利己心の全面的な肯定に至らざるをえない論理必然性をもっている。だからコントが社会の統一を求めて登場して来た場合には、個人主義の立場からのこれとの対決が避けられない。「われわれは、人生が、コント氏が利己的な性向と呼んでいるものに結びつけられるもの、一切の育成なしにすませられるほどに、快楽に富んでいるとは思わない。反対にわれわれは、これらのものを過度に抑えるのではなく、快楽を最大にする程度にまで十分に満足させることが、ほとんど常に慈愛心にとつても好都合なのだ⁽⁴⁾と信じている」と。この利己心肯定は、すでに述べたように生産論においては全面的に展開されているし、更にまた政治の領域にも持ち込まれ、代議政体肯定の論拠ともなるのである。「人間は、自己防衛する力をもつとき、あるいはまた自己防衛している割合に応じて、他人によって害されることから安全である。また自己依存的であるのに応じて、すなわち彼らのために他人がしてくることにではなく、個人的にであろうと集合的にであろうととにかく自分自身でなしうところのものに頼るのに応じて、自然との闘争においてより高度の成功を得るのである⁽⁵⁾」といっているように。そして、この引用にも明らかなように、自然法思想の後継者として利己心を肯定するこのような場面においては、市民社会に見られた自己外化の要求がなおその姿をとどめてはいるのである。

しかし、これまでくりかえし述べて来たように、ミルにとって利己心の肯定はもはや全面的なものではありえない。その過度の成長が他のすべての性格を破壊するのが、彼の時代における現実なのである。この状況を眼前にして、ミルは現実の進行にただ啞然とするばかりであり、なかならずそれが階級対立——ミルのことばによれば「邪悪な利害 (vicious interests)」の対立——に、そしてマジヨリティである労働者階級の団結に転化して行くのを見ると、全くふるえあがってしまうのである。そこで彼は、利己心を肯定しながらも、他方、自愛心を基礎とする社会にかわる何らかの結合原理を見出す必要にせまられる。先のユートピア像がこの恐怖からの逃避として描かれたとすれば、さし当り現実的なものとしては「社会主義」が問題として浮びあがって来る。「……当時（一八二〇年代）の私は一個の民主主義者ではあったが、社会主義者では毛頭なかったのである。ところで、今や（一八四〇年前後）私達は、過去の私よりも遙かに民主主義者でなくなっていた。と云うのは、教育が今日の様に見る影もない不完全な状態で続く限りは、民衆の無智、殊にその私欲と獣性とは恐るべきものだと考えたからである。それで私達の社会改善に関する究極の理想は、民主主義以上遙かに進んで、明らかに私達を広く社会主義者と云う一般的名称の下に截然類別するものとなったのである」⁽⁶⁾。

「社会主義」に対するミルの態度は、「自伝」や諸著作の各版における改訂から見て、初期には否定的であったのに対し、中期以後、後に妻となったテラー夫人の影響もあって肯定的なものとなったといわれている。また更に後には急進的なマルクス主義の出現を見て否定的な態度にもどったともいわれているが、この点は彼自身何らマルクスにふれていないので明確ではない。しかしいずれにしろ、ここで問題となるのは、彼の「社会主義」論そのものではなく、「社会主義」論との関連のもとでの彼の人間把握である。そしてこの点では、彼は依然として全く

の個人主義者にとどまっていたということができるのである。すでに述べた生産論と分配論の分離、そして生産論における利己心の肯定という前提から、当然のことながら、彼は「社会主義」をもっぱら分配の平等という意味でのみとらえる。その結果、「社会主義」の実現は人々の愛他心ないし公共的精神に依存しなければならないことになるのであるが、この点に関しては、これまで述べて来た諸事実にもかかわらず、ミルは、本質的には樂觀的である。それは例えば、功利主義の先にふれた「修正」に際して人々に本質的な「社会的感情」なるものを持ち出し、次のようにいつていることからもうかがえよう。すなわち、「平等者間の社会は、すべての者の利益が平等に見なされるべきであるという理解の上にのみ成立しうる。……このようにして人々は、他人の利益の完全な無視の状態を彼らにとって可能と見なしえないようになっていく」と。この点では、自愛心肯定の基礎に人間のより深いところにある共感(sympathy)とそれに伴う同類意識をおいたスミスの立場と、やはり相通するものがあるのである。ただ、すでにくり返し述べて来たように、ミルの時代においては、自愛心そのものは利己主義という形ですでにたえがたいほどに広く深く滲透し、他の諸性格を抑圧してしまっている。そこでは、たとえ本質的には樂觀的であるにしても、手ばなしで「社会的感情」に頼ることはもはや許されない。そこで、功利主義の場合には、次の二つのことを「功利主義の精神」の名で要求するのである。すなわち、第一に、法律及び社会施設の力によって、各人の幸福ないし利害をできる限り全体の利害に調和させること、第二に、教育及び世論の力によって、すべての個人の心に彼自身の幸福と全体の幸福との間の不可分なる結合を確立すること。⁽⁸⁾「社会主義」は、彼にとって、この第一の要請を満す制度と考えられるわけであるが、他方それが実現されるためには第二の条件が満されねばならないというのが彼の考えである。というのは、労働者の現在の無智蒙昧で利己主義的な状況のもとでは、「社会主義」は必然

的に人口増大をもたらし、その結果として全國民を飢えさせるであらうからである。そこに「エリートの間での社会主義」という考えも生れる。「私自身についていえば、普遍的利己主義 (universal selfishness) ということを信じてはいず、共產主義が人類のエリートの間で今すぐ実行可能であり、かつ残余の人たちの間でもやがてそうなるであらうと認めることに不都合を感じていない」と。こうして一切が教育に、教育が人々の利己主義をどの程度まで克服しうるかに、かかって来るのである。いうまでもなく、それは、杉原四郎の指摘するように、循環論以外の何ものでもない。「……環境の変化や教育の力によって人間性が大きく改造されうること認めながら、さてその可能性を現実性に転化するための第一条件たる生産関係の根本的変革が具体的な問題になって来ると、そのことの不可能性を論証するための究極の根拠として、改造さるべき当の対象たる『普通の人間性』をもちだして」来るのである。⁽¹⁰⁾

それでは、このようなミルの「社会主義」論から、われわれは何を読みとればよいのか。

第一に問題となるのは、彼のいう「社会的感情」である。もちろん、この「社会的感情」の育成が教育に依存しなければならぬということそれ自体は、現実におけるその喪失を示している。その意味では、このことはわれわれがこれまで述べて来たミルの時代における自我の存在形態を確認するものでしかない。と同時に、この「社会的感情」の内容が問題となる。先に引用した彼の社会科学方法論や、また「社会主義」のとらえ方からも明らかなように、ここで「社会的感情」と呼ばれるものは、他人もまた自分と同じ一個人・一自我であるということの理解であり、それを超えた共通の集団的な感情を意味するものではない。もちろん、「社会的感情」のこのようなあり方自体は市民社会に本質的なものではあったが、しかしスミスにおける「感情移入―共感」の原理にくらべて、ミル

のそれは明らかに人格的な連繋をより薄めているように感じられる。それは資本主義社会における等価交換の原理を人格間に持ち込んだにすぎないのであり、この「社会的感情」は商品的交りを超える人格的交りを含むものとは考えられないのである。したがって、この「社会的感情」に根ざす社会は、それが最高に育成された場合にも、相互に不可侵であることを理解し合った孤立した人々の集りではない。それはまさに、ミルのユートピアにおける「社会的感情」である。

第二に、このことの当然の帰結でもあるが、彼の「社会主義」論においては、そのような社会を実現する主体の問題は完全に喪失している。それは、論じられはしても、主体的にかちとらるべき社会ではないのである。そのことは、社会が不透明で・巨大な・自己に敵対する力としてあらわれ、個人が社会を対象としてそこに自己外化の活動を行うことがほとんど不可能になったこと（自己外化の困難性の増大）に対応する。そこでもまた、人間は、ミルのユートピアにおける人間像と同様につつましやかである。もちろん現実には、例えばチャーチスト運動に示されるように、市民社会的原理とは異った原理のもとに、人間の主体的な活動は再びはじまっている。すなわち、労働者階級の集団的な自己外化の活動として。しかし、先に見たように、ミルのもつ「社会的感情」からはこのような集団活動は理解できないものである。したがってこのような運動に対しては、彼は、労働者の貧困と無権利状態に対する度々の同情にもかかわらず、終極的には否定する他ないのである。「政治的にいつて同一の邪惡な利害をもっている人々の集り、すなわち、その直接の・外見的な利害が、悪いものさしの同一の目盛りを指し示している人々の集りを階級と考えるとすれば、望ましいのは、いかなる階級も、もしくは結合しがちな諸階級の連合も、政府に支配的な影響を及ぼさないことである」と。⁽¹¹⁾

- (1) "Political Economy" p. 453.
- (2) *ibid.* p. 66.
- (3) "Logic" p. 573.
- (4) J. S. Mill: "Auguste Comte and Positivism" (second ed. London. N. Trübner & Co. 1866) p. 145.
- (5) "Representative Government" p. 22.
- (6) 「ミル」 p. 239.
- (7) J. S. Mill: "Utilitarianism" (Tokio: Iyua & Co. 1883) p. 16.
- (8) *ibid.* chap. II.
- (9) "Representative Government" p. 22.
- (10) 杉原四郎「ミルとマルクス」(ミネルヴァ書房 1957) p. 238.
- (11) "Representative Government" p. 52.

五、ミルの生涯

——結論にかえて——

以上、われわれは、ミルの諸著作を通して、転換期における近代的自我の変容を追求した。ミルの思想が全体として矛盾に満ちたものであることから、われわれのこの追求もジグザグのコースをたどらねばならなかったが、彼の諸理想・諸方策を拾象してただ自我の存在形態のみに焦点をあてれば、次のように要約することができよう。すなわち、彼の時代において、近代的自我は一般に「我所有す、故に我あり」という形態に固着する。その結果として、利己主義・個性の喪失が一般的な傾向となる。かつて近代的自我を形成せしめた自己外化の活動は困難とな

り、自己外化の要求の減退、主体性の喪失が生じ、またそれに伴っていた数々の望ましい性格も過去のものとなる。自我は自己防衛的なものとなり、内へ向うことによって、つまり社会と隔絶されることによって、確立されるものと考えられるようになる。

ところが他方、近代的我のこのような変容にもかかわらず、ミルは、その著作活動を通して積極的な政治的発言をつづけ、晩年には下院議員に選出されたりもしている。そこで、以上に要約した自我の存在形態——それはミルの自我論であったともいえよう——と彼のこの行動との関連をどうとらえればよいかが、われわれに残された問題となる。もっともこの問題は、ミルを通してではなく、ミル自身の研究を要求する問題であり、ミル研究の新しいテーマをなすべき問題である。したがって、ミルを通しての研究が目的であった本論では、ごく簡単な素描にとどまらざるをえない。

この問題を考える上でまず前提として確認しておかねばならないことは、彼が本質的に「市民社会の思想家」であり、「市民社会の批判者」ではなかったということである。彼の視野は、基本的には、資本主義社会というこの環境に閉塞されており、そして彼の思想・活動のすべてはあくまでも個人主義的である。ところが、すでに資本制生産の確立した彼の時代においては、社会を対象とする自己外化の活動・つまり社会の変革は、「市民社会を超えるもの」を要求しているのである。それは、一方では、プロレタリアートという新しい・本質的に非個人主義的な人間像、とりわけその集団的な活動として、他方では、マルクス主義こそがそうなのだが、市民社会の外在的・批判的な把握として、あらわれて来てもいる。そして、この「市民社会を超えるもの」と結びつかない限り、自己外化の活動がかるうじてビジネスにおいてのみ許されるという状況は先に引用したところである。ミルの生涯の、あ

る意味で矛盾に満ちたともいふべき活動は、ミルの時代における市民社会のこの変化と、にもかかわらず彼をとらえて離さない「市民社会の精神」との矛盾にこそ、根ざしていると考えねばならないのである。

したがって、「急進的」であるつもりミルの主張は、一方では、ミルの努力とは無関係に、資本主義の発展の当然の結果として現実化され、しかもそれはそのたびに彼の理想を裏切るものとして現実化される。その限りにおいては、ミル自身もまた彼の時代の自我の存在形態への退行を示さねばならないのである。彼の苦悩の意味については先に述べたが、そこから「回復」したときにこの傾向はすではっきりとあらわれている。「……今や私は、この幸福と云う人生の目的にも、それを直接の目的とせず⁽¹⁾に置かなければ、決して到達し得るものではないと考える様になった。自分一己の幸福以外何か他の目的物、即ち他人の幸福とか、人類の改善進歩とか、乃至は或る技術、若しくは職業と云った様なものさえも、それを自己の幸福の手段としてでなく、それ自体を理想の一個の標的として専心する場合、何かそうしたものに自分の心を据えている人達のみが幸福なのである⁽¹⁾」ということばに示されているように、自己外化の活動を通しての自己充足という筋道はここで正しく維持されながらも、かつて全社会を功利主義の法則でつらぬこうとした強い意欲はもはやうしなわれ、外化活動の対象ないし場面が小さな範囲に限られて来ている。そして、「この時代に私の思想の受けた今一つの重大な変化は、私が初めて、人間の幸福の第一要件の一つとして、個人の内的修養の本来の価値を認識したことである。……私は今や、受動的な感受性は能動的な能力と同様に開発さるべきもので、それには指導を与えると共に、それを培養もし豊富にもする必要があることを経験上悟ったのである⁽²⁾」ということばには、内面への沈潜の態度が色こくあらわれる。それ自体は誤った考え方ともいえないこれらのことばは、にもかかわらず、苦悩におちいる以前の彼の活動とひきくらべるとき、「片すみ

の幸福」への傾斜を示していると考えざるをえないのである。彼の後半生を支えるテレー夫人への固着的な愛情は、まさにこの傾斜の延長線上に生じたものと解することができよう。

他方、彼の「急進主義」のもう一つの側面は、現実の展開によって、労働者階級の団結した力によってしか実現しえないものであることがしだいに明らかとなる。しかしミルは、本質的に彼らとのつながりをもたない。そこで、現実の進行の中では、全社会が彼に敵対するものとしてあらわれて来ることになる。その時ミルは、「社会主義」に關してはすでに見たような「紙の上への逃避」を示しつつも、民主主義者——市民社会の理想の継承者——としてはなお、勇敢にこの敵にたち向う（このこと自体は彼の時代錯誤の典型でしかないのだが）。いいかえれば、全社会と自己とが隔絶——この隔絶はミルの自我形態からは当然のことなのだ——されればされるほど、その社会を対象とする自己外化の要求が熾烈化するという状況が、ここには成立しているのである。しかし、先に述べた事情から明らかなように、ミルのこの自己外化の要求は現実化されない。対象の法則を認識しえず、それを実現するための自己の力をも認識しえないところでは、現実の自己外化は不可能だからである。したがって、ミルにおいて、この要求はただ観念的にのみ（紙の上で）実現され、観念的に実現されることによってますます観念的となる（自己外化の要求それ自体が観念的なものとなる）。そこに、彼の一人よがりの議會活動が成立するのである。ここでは彼は、実現可能なプログラムを提出してその実現に努力するというよりは、「流れに抗して」自己の空想を主張するにすぎないのであり、その当然の結果として一期で落選することになるのである。

こう考えて来ると、その多様な著述活動や政治活動にもかかわらず、ミル自身は本質的に社会から隔絶されていたということが、認められねばならないであろう。そのことによって始めて、ミルの自我が、「市民社会の最後

の思想家」としての自我が、成立しえたのである。

- (1) 「ミヤコ」 p. 152~3.
- (2) *ibid.* p. 153~4.